
えんどれすらぶ

郁子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えんどれすらぶ

【Nコード】

N3388E

【作者名】

郁子

【あらすじ】

過去のトラブルで男不信になった主人公。高校生活を送りながら少しずつ男子に対しての好きという感情がまた芽生え始める。女友達、元カレなどの壁に当たりながらも愛を深めていくが……？衝撃の結末。

プロローグ

あなたは永遠の愛を信じますか？

えんどれすらぶ

もう恋愛なんてしないって
人を好きになったりしなうて
決めたはずだった。

でも君に出会えたことで
私の考えは変わってしまったの……。

あたしはこれからも
君への永遠の愛を誓って生きていくから。

第1話 遠い瞳

今日は高校の入学式。

「ねえ、名前何ていうの？」

「美緒。高瀬美緒だよ」

すぐさま明るいキャラを作り出す。

これが高校でのあたしだから。

「美緒って呼ぶね。あたしは瀬戸口彩。あやって呼んで」

「あやね。これからよろしく」

こうしてあたしの高校生活は幕を開けた。

このまま順調に過ごしていければ良い。

って思っていたけど、そう人生は単調じゃない。

「ねえねえ、美緒の隣の子かっこよくない？」

興味は無かったがふと隣を見てみた。

あっ。

雲の向こうの星……

しかも太陽の光に紛れて見えない星を見ているような遠い瞳。

なぜそんなに遠くを見ているの？

ふと疑問を抱くような彼の瞳に
あたしは知らぬ間に吸い込まれていたのかもしれない。

「美緒？ 見とれすぎ」

「えっ……」

あやのからかっているようで実は妬みが含まれている声に驚いた。
でも、あたしはこの声をよく知っている。

「見とれてなんかないよ。確かにかっこいいかもね」

「でしょ。あたしあんな顔がタイプなんだ」

ひとまず落ち着く。

男は顔じゃない。中身だよ。

と内心はあやに反発しながらも隣を気にしているあたしがいた。

「そっか……」

あやは会話が続かないと分かると

他の友達のところへ行行ってさっきの男を教えているようだった。

おもむろに隣を向くと……目が合ってしまった。まずい。

「高瀬さんだね？ 俺、中野晃希、よろしく」

すぐに目を逸らしたが遅かったようだ。

こいつと喋ったって良いことなんてない。そんな気がする……。

私は席を立った。

「待ってよ」

「なに？」

はあ……

シカトしとけば良いのに何やってるんだろ、あたし。

「高瀬さんってどこ中？」

「……緑丘」

それだけ言っただけで立ち去る。

一番、突っ込まないで欲しいところに突っ込みやがって。

……やっぱりね。

そこには、あたしを細い目で見るあやの姿があった。

「あの人、中野晃希っていうらしいよ」

明るく興味無さ気にできるだけあやの反感を買わないように……
細心の注意を払ってあやに話しかける。

そして、ちゃっかりフルネームを覚えてる自分に嫌気がさす。

「そっか。美緒ばかり喋っちゃってずるいよ」

笑っていても笑っていない。あたしもあやもきつとそんな感じだ。

「あやも一緒だったら良かったのにな」

別の友達が口を挟む。

「みんな、あたし本気で晃希くんのこと狙っちゃうから。協力よろしくね？」

バカらしい。

皆に公言すれば、あたしが手を出せないと思った？

もともとあたしは男に興味無いのにね。

あやが言うみんなは次々に了解していくなかであたしは黙り込む。その間もあやの視線はあたしから離れない。

「良いよ。応援してるから！」

「ありがとう、美緒」

これであたしは中野くんには手が出せない。

それはあやの思惑だけではなくあたしの思惑でもあった。

すぐに立ち去ると怪しまれそうなのでしばらくはあやの話を聞いていた。

自分が過去どんな人と付き合ったとか、いわゆる恋バナっていうやつ。

そのうち他の友達も自らの体験を話し始めた。

やばい。

早くこの場から逃げないとあたしも話さなきゃいけなくなりそうな雰囲気。

「美緒は誰かと付き合ったことあるの？」

「えっ……」

突然話を振られ話し出せないあたしをあやは見下すように見つめた。

「美緒は付き合ったこのないの？」

「可愛いのにね。でもそんな感じはするかも！」

あやは更に見下したような声であたしをけなす。

周りはそれを聞いてクスクスと笑い出した。

「ばっかじゃないの。」

「誰もそんなこと言ってないし。付き合ったことぐらい普通にあるよ」

余裕の表情で答える。でも心は全然、余裕なんかじゃない。思い出したくない過去をえぐられ、今にも崩れ落ちそう。

「だよ。今時、付き合ったことないなんてね」

あやは少し気にくわなそうな顔をしながらも平然と取り繕っていた。

逃げたい……もう心が耐えられない。

そしてタイミングよくチャイムが鳴る。

集団が崩れ、みんな自分の席へと帰っていった。

席に着いてもあやは話しかけてこなかった。

あたしにとっては嬉しいことだった。

だけど、今、あやに嫌われるは今後の高校生活に支障をきたしそう

な気がした。

「中野くんに話しかけてみれば？」

「そうよね……話しかけなきゃ始まらないよね」

あやもあたしと仲良くしといた方が良いと判断したようだ。

仲良くしないと中野くんを取られるとでも思ったのか。

あたしは心の中でクスツと笑ってみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388e/>

えんどれすらぶ

2010年10月26日08時53分発行